

昭和20年における大妻技芸学校生の動向と心情

—國井アキ氏関連資料の紹介から—

Activities and feelings of Otsuma Arts School students in 1945

—From Introduction of Documents Related to Aki Kunii—

青木 俊郎

大妻女子大学博物館

Toshiro Aoki

Otsuma Women's University Museum

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：戦争，空襲，卒業，手紙

Key words : War, Air Raid, Graduation, Letter

抄録

昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲により、大妻学院（大妻高等女学校、大妻女子専門学校、大妻技芸学校、大妻第二技芸学校本科）は大きな被害を受けた。当時、大妻技芸学校に在籍していた國井アキの関連資料とご家族の証言から、國井の東京大空襲、そして卒業式までの動向について述べる。そして、大妻技芸学校卒業に際して、同級生の豊子から國井に宛てて送られた手紙から、当時の在学生の悲壮な心情を読み取る。

はじめに

昭和20年（1945年3月10日未明の東京大空襲により、大妻学院（大妻高等女学校、大妻女子専門学校、大妻技芸学校、大妻第二技芸学校本科）は大きな被害を受けた。この当時の状況について、大妻学院の通史である『大妻学院八十年史』では、被害の詳細や避難の経過とともに、主に教員・春日多美の回想を元に記載している。一方、当時在学していた学生の心情についての言及はほとんどない¹⁾。学院には多くの教職員・学生などが在籍していた。大妻学院と戦争について考えるとき、これら大妻と関わりのある人々一人一人が、この状況に対してそれぞれの立場でどのように対応し、どのように受け止めたか、その事例を積み重ねていった上で検討する必要があるだろう。

そこで本論では、昭和20年に大妻技芸学校に在籍していた一人の学生のあゆみについて紹介する。

依拠するのは、「國井アキ氏関連資料」（大妻女子大学博物館所蔵）である。この資料の内容、そしてご家族の証言から、國井アキ氏（以下、本文では敬称を略して記載する）が昭和20年3月10日の

東京大空襲から3月28日の技芸学校卒業までどのように歩んだのかについて述べる。そして、國井に宛てられた手紙から読み取れる大妻技芸学校生の心情について、検討してみたい。

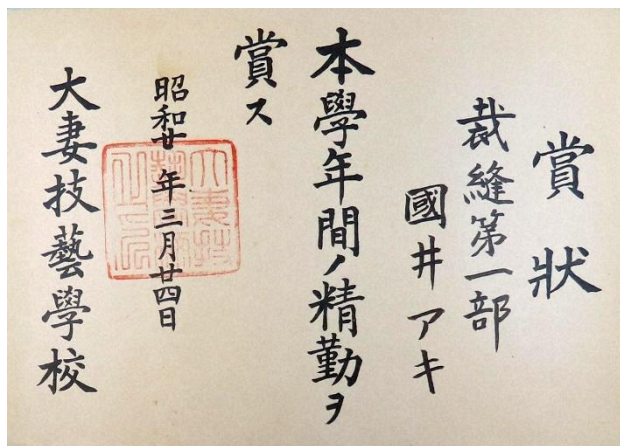
1. 「國井アキ氏関連資料」の概要

本資料群は、大妻技芸学校の卒業生である國井アキに関わる資料で、令和3年（2021）、ご家族より博物館に寄贈されたものである。なお國井アキは、結婚により古田姓となるが、本稿では主に技芸学校在学中について述べるため、姓は國井に統一して表記する。

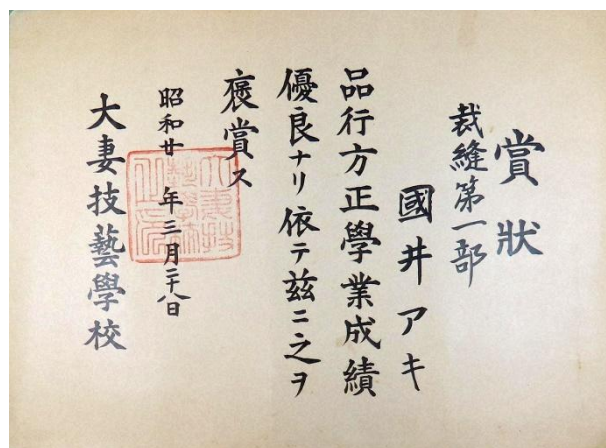
博物館に寄贈された資料は全7件である。内容は、國井が技芸学校在学時・卒業後に受領した賞状・卒業証書・免許状および、在学中に教科書として使用したと思われる冊子（『和服裁縫 後編』）である。この冊子には、単長着などの仕立て方法が記されている。

資料の一覧（名称・年代・寸法）と画像は次の通りである。

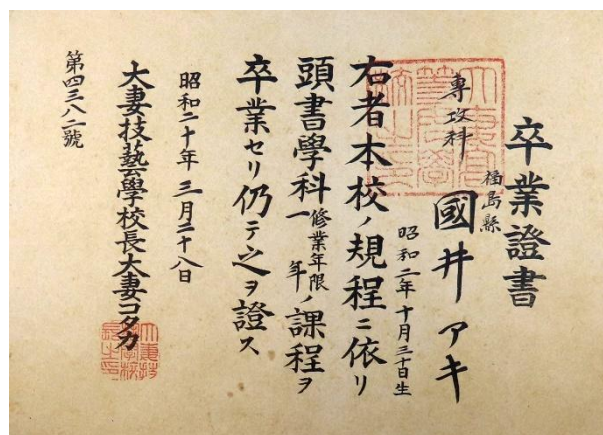
- 1 賞状 (年間精勤)
昭和 20 年 3 月 24 日
縦 19.4 cm、横 26.8 cm
- 2 賞状(品行方正・学業成績優良)
昭和 20 年 3 月 28 日
縦 23.6 cm、横 31.6 cm
- 3 卒業証書(大妻技芸学校専攻科)
昭和 20 年 3 月 28 日
縦 18.7 cm、横 26.1 cm
- 4 国民学校専科訓導免許状(東京都・裁縫)
昭和 21 年 1 月 20 日
縦 21.5 cm、横 30.6 cm
- 5 『和服裁縫 後編』 (大妻女子専門学校)
縦 21.0 cm、横 29.6 cm
- 6 卒業証明書
昭和 20 年 3 月 28 日
縦 25.5 cm、横 17.6 cm
- 7 國井アキ氏写真 (複製)
 - (1)大妻技芸学校入学時(昭和 19 年 4 月)
 - (2)大妻技芸学校在学時(昭和 19 年~20 年頃)
 - (3)大妻技芸学校卒業時(昭和 20 年 3 月)



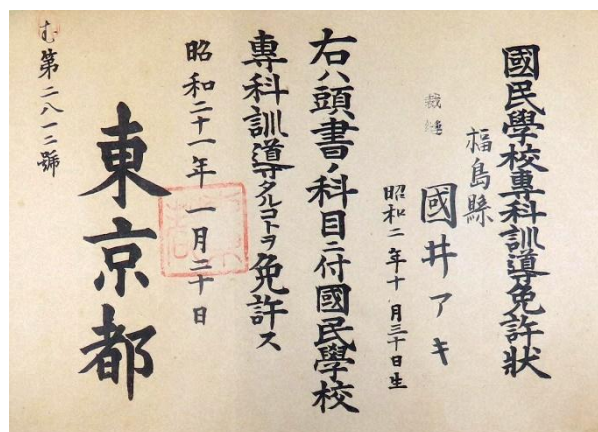
資料 1. 賞状 (年間精勤)



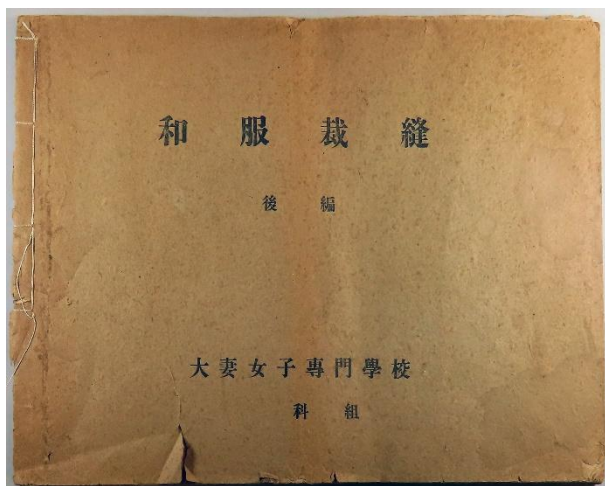
資料 2. 賞状(品行方正・学業成績優良)



資料 3. 卒業証書(大妻技芸学校専攻科)



資料 4. 国民学校専科訓導免許状(東京都・裁縫)

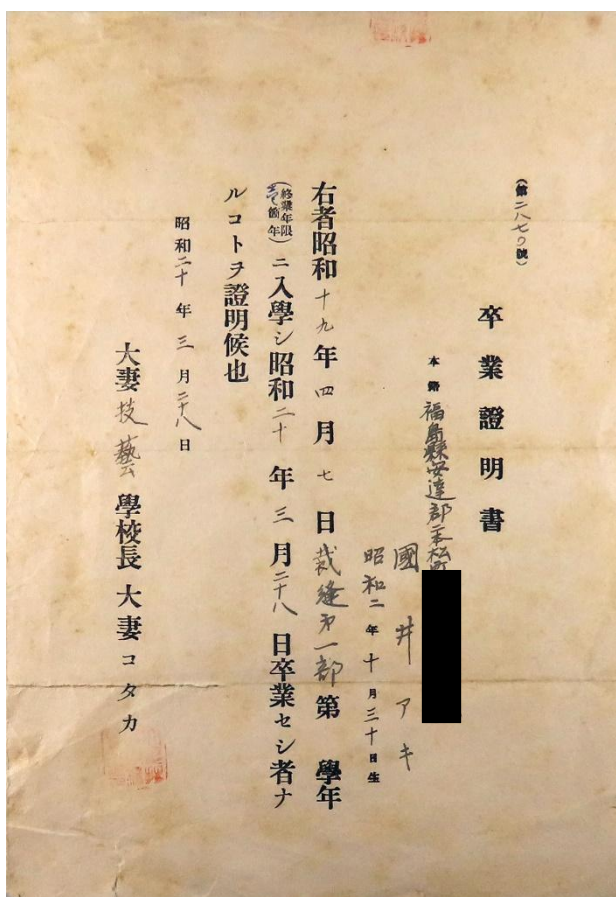


資料 5. 『和服裁縫 後編』(大妻女子専門学校)

資料 7. 國井アキ氏写真 (複製)



(1)大妻技芸学校入学時(昭和 19 年 4 月)



資料 6. 卒業証明書

※住所の一部はマスキング処理を行った。



(2)大妻技芸学校在学時(昭和 19 年～20 年頃)



(3)大妻技芸学校卒業時(昭和 20 年 3 月)

2 國井アキの略歴

國井アキの略歴は、前掲資料の内容、そしてご家族からの聞き取りによれば次の通りである。

國井アキは、昭和2年(1927)10月30日^[2]、福島県二本松町(現・二本松市)の米問屋「國井八郎商店」の一男四女の二女として生まれた。その後、福島県立福島高等女学校(現・福島県立橘高等学校。福島市)に進学し、昭和19年4月7日、大妻技芸学校専攻科裁縫第一部に入学した(修業年限1年)^[3](16才)。在学中は、品行方正・学業成績優良などの賞状を受けており^[4]、学業に真面目に取り組んでいたものと思われる。そして昭和20年3月28日、技芸学校を卒業し^[5](17才)、翌21年1月20日には、国民学校専科訓導免許状(裁縫)を取得している^[6](18才)。

技芸学校卒業後は故郷の福島県に戻り、昭和27年4月、同県郡山市の古田清二と結婚(24才)、郡山市鶴見担に居を構えた(以後、古田姓)。郡山市に嫁ぐと同時に、周囲から請われ、自宅で和裁教室と書道教室を開いた。その後、郡山女子大学附属高等学校(福島県郡山市)において家庭科・書道科教諭科の教諭を務め(昭和40年頃～平成5年頃)、また、今泉女子専門学校(福島県郡山市)においても家庭科・書道科の講師を務めた(昭和55年頃～平成5年頃)。

昭和50年頃からは書道教授としても活躍し(雅号:古田紫苑〈しおん〉)、各展覧会にて多数受賞している。平成5年(1993)には毎日書道展で毎日賞を受賞し、作品及び解説を収録したビデオ「第四十六回毎日書道展」(毎日書道会販売)が販売された。

その後も学校講師をしながら、平成23年3月11日の東日本大震災まで和裁・書道教室を運営していた。そして平成28年12月11日、89才で没した。

3 『和服裁縫 後編』挿入書付

今回の資料群は、終戦の前年に技芸学校に入学し、東京大空襲直後に卒業を迎えた学生の記録として、大変貴重なものである。特筆すべきは、資料5(『和服裁縫 後編』)の中に書付が挟み込まれていた点である。この書付は、「豊子」差出で、國井アキ宛ての手紙であると推定される。以下、全文を翻刻する。

《翻刻凡例》

- 【右上】・【右下】などの位置表記は、次頁の写真掲載方向によって便宜的に付した。
- 元から付されていた読点は、原文どおり「、」で表し、筆者が追加で挿入した読点の箇所は「/」を表記した。
- 改行は原文の通りとした。
- 住所の一部は、資料画像上ではマスキング処理を施し、翻刻文では字数分の「■」で表記した。

【右上】

友ゐなば/後は淋しくなりなまし
心つくして文送りてよ

国井さん/懐しい思ひ出もみんな昔の夢と
過ぎ/二人とも永久に別れの門出の今日/
想へば中寮の廊下に幾夜を明した事
でせう/忙しい中にも後れる私をはげまして
手伝って下さった温き友情/たとへ遠く別
れても永く私の胸に秘められます/
国井さん/短い間の生活でした、共に苦
労をしましたね、屋上で夜すゞみの寝
巻姿/遠く故郷を思つては唄を歌つ
て慰め合ひ、一つの物も分け合つて空腹
をしのび/泣くも笑ふも二人きりね、
国井さん/たとへ別れても又天国で逢
ひませう、御幸福なお家庭を
持って下さい/せめてのお名残に

左様奈良

三月二十八日記

豊子より

【右下】

友ゐなば/あとは

【左上】

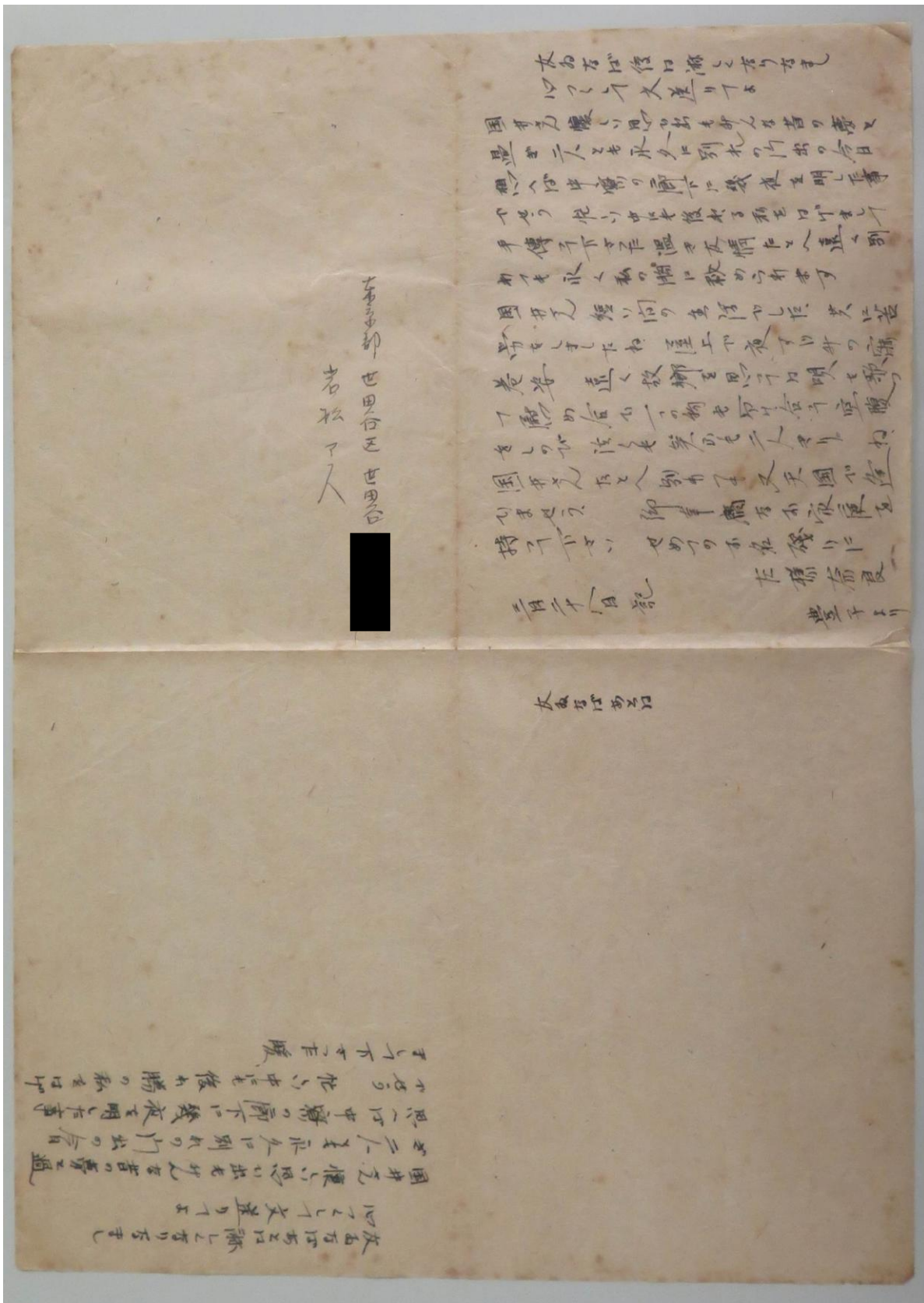
東京都世田谷区世田谷 ■■■■■■

岩松マス

【左下】

友ゐなば/あとは淋しくなりなまし
心つくして文送りてよ

国井さん/懐しい思ひ出もみんな昔の夢と過
ぎ/二人とも永久に別れの門出の今日/
思へば中寮の廊下に幾夜を明した事



資料5. 『和服裁縫 後編』挿入書付

※住所の一部はマスキング処理を行った。

でせう／忙しい中にも後れ勝の私をはげ
まして下さった暖

次に、書付の内容について検討する。この書付は、紙が四分の一に折られ、手紙の草稿が二面（右下・左下）、浄書が一面（右上）、メモ書き（「岩松マス」住所）が一面（左上）と考えられる。

左上以外の三面については、同一人物（豊子）の筆跡だと思われる。しかし、左上については、豊子の筆跡であるかは確証を持ってない。

また、右下・左下は、文章が途中で止まっている一方、同様の内容である右上が、最後まで書き終わっている。このことから、豊子が手紙を作成する際、右下・左下の草稿を経て、右上の浄書部分が成立したものと考えられる。

次に、手紙の差出である「豊子」について検討する。資料中、「忙しい中にも後れる私をはげまして手伝ってくださった」との記述から、國井と同じ授業を受けていたものと考えられる。また、「遠く故郷を思っては」とあることから、國井と同じく地方から上京していること、そして「中寮の廊下に幾夜を明した事」・「屋上で夜すゞみの寝巻姿」とあることから、二人は共に中寮（本校内にあった寄宿舎の内の1つ）で寄宿生活を送っていたのだろう。以上のことから推測すると、豊子の名字は不明であるが、國井の技芸学校の同級生であると考えられる。

大妻学院所蔵資料（非公開）によれば、國井と同じ級内に一人「豊子」が存在する。國井のご家族の証言によれば、豊子は仲の良い友人の一人で、千葉県出身であったとのことだが、その出身地についても一致する。また、國井とこの「豊子」は、現居住地も同じ「本校第一寄宿舎」である。第一寄宿舎は、東・中・西の3棟から成る^[7]。おそらくはこの人物が、國井と友人であった豊子である可能性が高い。

左上部分に目を向けると、ここに記載されている「岩松マス」とは、大妻学院で裁縫を教えていた教員である^[8]。岩松は國井・豊子が所属していた専攻科裁縫第一部一組の学級主任であった（大妻学院所蔵資料）。ただし、ここに記されている住所は、大妻の卒業アルバムに記載されている岩松の住所（昭和18年・29年当時）と同一ではない^[9]。推測となるが、二人（豊子・國井アキ）の学級主任

であった岩松の住所（昭和20年当時）をメモとして記したものと考えられる。これは卒業後も連絡を取るためであったのかもしれない。

再び浄書部分（右上）の内容に戻ると、手紙の文中、「国井さん」と呼びかけられていること、そして、この書付が國井アキの遺品の中に挟み込まれていたことから、この書付は、豊子差出・國井アキ宛の手紙であると考えられる。一枚の書付の中に草稿やメモが含まれてはいるが、國井アキの手に渡っていることを考えると、この紙書付が豊子から國井アキのもとへ渡り、手紙としての機能を果たしたことは間違いないだろう。

そしてこの手紙が書かれた3月28日は、國井が大妻技芸学校を卒業した昭和20年のことであると推測される。

4 東京大空襲と卒業式

ここでは、國井の後年の述懐などから、3月10日から卒業式までの経過を追う。

昭和20年は、3月10日未明に東京大空襲があり、大妻学院は大きな被害を受けた。この空襲により、木造講堂は焼失、鉄筋校舎も3・4階の一部が焼け残った、という状況であった^[10]。また学生寮の被害としては、東・中・西・北、楠木寮は全焼、南寮だけが焼け残った^[11]。つまり、豊子の手紙に出てくる中寮も焼失している。

國井が後年、自身の娘や孫、そして書道の弟子へ語った空襲当日、そしてその後の経過は次の通りである。

空襲時、寮監先生の指示で、寮も危ないからと靖国神社まで逃げたという。國井らは、靖国神社に守ってほしいと祈りながら、寒空の中、着の身着のまま必死に逃げたという^[12]。まもなく寮に爆弾が落ち、皆で部屋の窓が順番に火に包まれるのを見て「〇〇チャンの部屋だ」、「次は××チャンの部屋だ」、「私の部屋・・・」と肩を抱き合っただけで泣いていた。その後、國井らは焼け跡の寮に皆で戻った。すると卒業式に着るようと國井の実家から送られてきていた新しい着物は焼失してしまっていた。その焼け残った着物の切れ端などを持って、被災者列車に乗るよう指示され、上野から福島県二本松へ戻った。

國井によれば、在学中、大妻の先生から帰省する寮生に対して言われていたこととして、いつ何

がおこっても自分の生きた証であるから、自分の作品は実家に置いてくるように、との指示があったという。まさしく、この指示により実家に持ち帰っていて難を逃れた手縫いの着物を持って、國井は上京し、卒業式に出席したという。そのときに撮った写真が資料 7 (3) であるという。後日、娘を生きて帰してくれた大妻の先生方に対し、國井アキの母は感謝の手紙と商っていた米を送ったという。

大妻学院では、空襲後も授業は継続していた^[13]。そしてこの年の卒業式は、3月18日に行われ、中等部をはじめ、いくつかの学校別に分けて3回くらい実施したという。講堂は全焼したため、本校舎前のグラウンドで、焼け残った肋木を背に卒業式を挙行了たという^[14]。

ただし、実際に卒業式が行われたのは3月28日の可能性が考えられる。その理由は、手紙の中の3月28日という日付が、本資料群中の「卒業証書(大妻技芸学校専攻科)」(前掲資料3)および「卒業証明書」(前掲資料6)の日付と一致するためである。技芸学校の卒業式が実際に行われた日付は不明であるが、この日に行われた可能性が高い。また、大妻コタカ著『ごもくめし』では、卒業式は3月28日に行われたと記されている^[15]。つまり、この日に卒業式が行われ、卒業式の場で豊子は國井と対面し、この手紙を國井に手渡したのではないだろうか。

おわりに

最後に、この手紙から読み取れる2人をとりまく状況と、豊子の心情について述べる。

この手紙の中では、戦争中の体験や空襲の被害については直接的に触れられていない。しかし、「一つの物も分け合って、空腹をしのび」と、食料が不足している記述が見える。國井が後年、自身の娘や孫、そして書道の弟子へ語ったところによると、当時の大妻の生徒は裕福な家庭出身の学生がほとんどであったが、寮の食事は乏しく、寮生たちは、実家から荷物が届き、食料が多めに入っていれば皆と部屋でこっそり分け合って食べ、少ないと各自モンペの中に隠してトイレに入って大急ぎで食べていた、という。

またこの手紙の内容は、単なる卒業後の別れではなかった。3月10日の東京大空襲により、2人

の命は助かったものの、住んでいた寮から焼け出され、國井は一度福島の実家に戻っている。大妻学院も、校舎・寮に壊滅的な被害を受けた状況であった。

東京大空襲後、米軍機は山手方面へ襲来していた。そのため、退職や疎開で多くの教員が大妻を去り、教職員は10人足らずになってしまった^[16]。自分たちはこれから卒業するものの、母校である大妻学院は存続も危うい状況であった。

手紙に記された「友みなば後は淋しくなりなまし心つくして文おくりてよ」(友が居なくなってしまうと、その後は淋しくなってしまうだろう。真心を込めて手紙を送って下さい)の短歌には、単に卒業による別れのみではなく、空襲により散り散りとなってしまった大妻の教職員・学生のことが念頭にあったことだろう。そして、「二人とも永久に別れの門出の今日」、「たとへ別れても又天国で逢ひませう」の文言からは、文字通り、友と生きて再び会うことは叶わないかもしれないという豊子の悲壮な心情を読み取ることができるだろう^[17]。

謝辞

本論文執筆にあたり、林恵子氏(國井アキ氏ご息女)、泉直子氏(大妻女子大学 学生支援センター学生支援グループ)より、ご教示とご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。

脚注

- [1]大妻学院八十年史編纂刊行委員会編『大妻学院八十年史』(学校法人大妻学院、1989年) p.383-387。
- [2]「卒業証明書」(國井アキ氏関連資料6、大妻女子大学博物館蔵)ほか。
- [3]「卒業証明書」(國井アキ氏関連資料6、大妻女子大学博物館蔵)ほか。
- [4]「賞状(年間精勤)」(國井アキ氏関連資料1、大妻女子大学博物館蔵)、「賞状(品行方正・学業成績優良)」(國井アキ氏関連資料2、大妻女子大学博物館蔵)。
- [5]「卒業証明書」(國井アキ氏関連資料6、大妻女子大学博物館蔵)ほか。
- [6]「国民学校専科訓導免許状(東京都・裁縫)」(國井アキ氏関連資料4、大妻女子大学博物館蔵)。
- [7]『大妻学院八十年史』p.304。
- [8]1897～1972。大妻技芸学校裁縫第一部卒業後、大正13年(1924)から大妻で和裁を教えた(『大妻学院八十年史』p.276-281)。
- 後年國井は、岩松から厳しく、そしてきちんと裁縫を教わったことから、今でもしっかりと着物を縫うことができ、また細かいことも覚えている、と語っていたという。
- [9]「大妻技芸学校卒業アルバム」(昭和18年3月、大妻女子大学博物館蔵)によれば、この当時、岩松は渋谷区幡ヶ谷居住となっている。また、「大妻女子大学家政学部卒業アルバム」(昭和29年3月、大妻女子大学博物館蔵)では、渋谷区代々木居住である。

- [10]『大妻学院八十年史』p.383・385。
- [11]『大妻学院八十年史』p.383。昭和11年、寮3棟(東寮・中寮・西寮)から成る第一寄宿舎が完成、他に南寮、北寮、鑄木寮があった。東・中・西寮は生徒数各7・80名ほど、南・北・鑄木寮は各15名ほど、合計約300名が暮らしていた(『大妻学院八十年史』p.311-312)。
- 國井が後年語った当時の生活として、寮では一室4～5名で生活し、毎日当番交替制で靖国神社の掃除へ行っていたという。
- [12] 國井らは靖国神社(北方向)へ避難したが、その一方、当時教員であった春日多美は、南方向へ避難している。春日は、空襲警報により20名の寮生を学校の地下室に避難させた後、寮に焼夷弾が落下したため消火に当たっていたが、消火できなかった。その後一人で学校の前の道を石垣沿いに五味坂方向へ歩き、麴町小学校に避難した(『大妻学院八十年史』p.385)。
- [13]『大妻学院八十年史』p.383。
- [14]『大妻学院八十年史』p.387。
- [15]大妻コタカ『ごもくめし』(大妻学院、1961初版・1979年改訂。p.204)では「昭和二十年三月十日、戦災のために校舎が全焼して、二十八日には運動場の焼け残ったロクボクの前で卒業式をしました。」とある。
- [16]『大妻学院八十年史』p.386-387。
- [17] 國井のご家族のお話によれば、戦後、國井と豊子は連絡を取っていたようで、豊子は、國井より先に亡くなったという。また、國井と豊子の再会が実現したかどうかについては不明である。

(受付日：2024年11月30日、受理日：2024年12月23日)



青木 俊郎(あおき としろう)

現職：大妻女子大学博物館 学芸員

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程史学(日本史)専攻単位取得退学。
専門は日本近世史・近代史。現在は大妻学院の歴史について研究を行っている。
主な論文：「彦根藩における井伊家当主の遠忌行事ー遠忌済祝儀を中心にー」(『近江地方史研究』、2014年7月)、「彦根藩藩校絵図の基礎的検討」『彦根市文化財調査報告書6：特別史跡彦根城跡 彦根藩弘道館跡 範囲確認調査報告書』(彦根市教育委員会、2015年3月)